

メトニミーのもつ認知内容発露機能

嶋 村 誠

I はじめに

いかなる意味論も言語表現の意味を捉えることがその主たる研究課題であるが、どのような意味論観に基づいているかによって、意味へのアプローチが大きく異なってくる。Lakoff and Johnson (1980) やLakoff (1987) に従って、意味論観を、客観主義のものと経験基盤主義のものに二分して考えると、形式意味論など客観主義意味論観にささえられた意味論においては、言語表現の意味を捉える作業は、記号と、外界（すなわち記号外の世界）にある存在物との対応関係を指定する作業にほかならない¹⁾。実際の作業においては、モデルを設定することによって外界にある存在物をモデル理論的構築物のかたちで規定し、そのうえで記号とそのモデル理論的構築物とが対応させられ、その対応関係を真理条件によって記述するというアプローチがとられる。したがってこのような措定においては、記号と外界の存在物とをいわば直接的に対応させるものであり、両者の間に、言語の使用者たる人間の介在、すなわち言語使用における人間の認知作用がまったく考慮されていない。このような客観主義意味論観に基づく意味論を、以下では真理条件意味論と呼んで議論することにする。

前世紀後半における言語学の歴史を振り返ってみると、意味を記述するこ

1) ここで外界とか言語外の世界と呼んでいるものは、必ずしも現実に目に見える世界だけではなく、夢の世界や創造の世界などをも含んでいる。

との必要性を誰しも認めながらも、記述の形式を重んじることが科学的研究方法につながるとの信念も手伝って、統語論や音韻論がまず優先的に研究されたことを思うとき、そうした状況下においてもなんとかして意味を捉えようとした真理条件意味論は、決してその意義を否定されるべきものではなく、今後の意味論学界のあるべき姿への発展に寄与するうえからも、それなりに評価すべき意義をもっているということができよう。

しかし、人間の関わりをまったく考慮しないで、記号が記号外の世界にある存在物に対してもつ指示機能を、両者の直接的な対応関係のみによって捉えようとする真理条件意味論の方策に対しては、人間の認知作用を重視する経験基盤主義に基づく認知意味論という新たに形成されつつある意味論の立場から、意味に関してまだまだ捉え切れていない側面があることが続々と堰を切ったように指摘されるわけである²⁾。

本小論では、言語表現の意味のなかには、記号が記号外の世界にある存在物を指示する機能をあきらかにする作業を進めることを主要課題とする真理条件意味論によって切り捨てられている側面があること、また、そのような作業によって得られたものをもって言語の意味と考えたのでは、真理条件意味論には、理論的大変革を行わない限り克服することのできない不備が存在すると考えられることを指摘し、その点における認知意味論の記述妥当性の高さを検証することを試みたい。

II 表現の指示機能

まず次の例のように、もっぱら記号が記号外の何を指示しているかに重点がおかれているような場合をみてみよう。

- (1) a. The cat killed the rat.

2) 認知意味論の概念について詳しくは、Lakoff (1987)、Langacker (1987, 1991a, 1991b)、Taylor (1995)、Ungerer and Schmid (1996)、河上 (1996)、坂原 (1998)、杉本 (1998)、山梨正明 (1995)などを参照。

- b. Lee kissed Kim.
- c. The dog is in the kennel.
- d. Kim is on the sofa.

これらの例のような場合には、the cat、the rat、Lee、Kim、the dog、the kennel、the sofaなどがそれぞれ何を指示しているかに関して、真理条件意味論の設けるモデルによって、記号外の世界の存在物を示すものとして用意されるモデル理論的構築物との対応関係が示され、指示対象が言語表現によって字義通りに何の問題もなく同定されることが示される。

客観主義意味論観に立つ限りこれで意味の記述は完了するわけであるから、その限りにおいて意味記述に成功しているわけである。また言語表現の指示作用としては(1)のような種類のものがもっとも普通であると考えられ、こうした例における意味記述を基礎にして、他の複雑な指示作用を含む場合にも、それらをこうした比較的単純な指示作用の記述へ還元する方策を用意することにより意味を捉えることができる、と考えられても不思議はない。

Ⅲ メトニミーのもつ意味の記述

事実、少し複雑な指示作用を含む場合、例えば、

- (2) Plato is on the top shelf.³⁾

において、Platoは字義から言えばあの人間プラトンの人名であるが、この文におけるPlatoは人間プラトンが指示対象ではない。指示対象は一番上の棚にある本である。ただ、その本はプラトンが書いた本のことであり、人間プラトンとその本とが、著者とその著作物という密接なきずなでつながっており、そのきずなによって、例(2)は(3)を意味することができるわけである。

3) (2)(3)はFauconnier (1985/1994 : 4)からの例。下線は筆者。

(3) The books by Plato are on the top shelf.

(3)は、(2)と異なり、字義通りの解釈によって指示対象を同定することができる。その点では例(1)などと同じである。そして、例(1)などの単純な指示作用の場合の意味記述は成功していると考えられる真理条件意味論にとっては、例(2)を(3)のような構造に何らかの方法で結びつける方策を講じることによって、意味を記述しようとする試みがなされることになる。真理条件意味論にとっては例(2)のような指示作用は特殊なケースであり、こうしたものは、より一般的な指示作用を捉える意味記述手段に還元する方策を用意しておけばそれで意味を記述する作業は完了すると考えられていると思われる。

もしも指示対象を措定することが、あらゆる言語表現に関して、それがもつ意味のすべてであるならば、このような真理条件意味論における方策によって得られる作業結果は意味を余すところなく記述しているということになるであろう。

ところで、例(2)のPlatoがもつ意味機能は、一般にメトニミー(metonymy)と呼ばれる⁴⁾。これはある対象（この場合はプラトンが書いた本）を指示するのに、それを字義通りに表す表現（この場合はthe books by Plato）の代わりに、それと隣接関係によって密接に関連すると考えられる別の指示対象を表す表現（この場合はPlato）を代用することによって指示するという機能のことである⁵⁾。例(2)の場合、

(4) 製造者が製品を表す

4) メトニミーは「換喩」と訳されることも多いが、伝統的な文体論などでことばのあやとされていた特殊な修辭的技巧によるものだけでなく、ごく普通の日常的な表現のなかに存在する、字義通りの解釈では意味を捉えることができないもののなかにみられる同種の現象をも含めるために、認知言語学で広く行われているように、伝統的な換喩のみに限定しない用語として「メトニミー」を用いることにする。

というタイプのメトニミーが用いられている。

このようなメトニミーと呼ばれる機能は、伝統的な文体論などで考えられてきた特殊な修辭的技朧のような言語表現のしかたの問題として捉えておけばよいものではなく、人間が本来行っている認知作用のなかにひろく潜んでいる様式であり、したがって、人間の概念把握や理解の様式に関わる問題である⁵⁾。つまり、われわれ人間が言語を用いて意味を理解したり概念を把握したりするときには日常的に行っていることであると考えられる。

こうした認識にたってもう一度例(1)に立ち返ってみよう。本棚にあるプラトンの書いた本を指すためには、何もPlatoと言わなくても、ほかに幾通りも方法があったはずである。その本の装丁の特徴や、大きさや、色など、その本のもつ数々の特徴を用いて指すことが可能であろう。そしてその可能性の中のひとつとして、例(2)のように言うこともできたはずである。それにもかかわらず(1)のように言ったのはなぜであろうか。

その理由として、例えば、(2)のようにいちいちthe books by Platoというのはいかにも面倒くさいので、代わりに単にPlatoと言えれば済むのであればそのような表現方法のほうがよほど便利である、というわけで、省略法という経済原理に基づいてはしよった言い方をしているのであると説明することは、一面の真理を捉えた可能なことかもしれない。確かに、どのメトニミー

-
- 5) メトニミーは「隣接関係」に基づく比喩であるという説明が一般に広く受け入れられているが、その隣接関係とはいかなるものかということに関しては古くから研究が行われている。しかし、この点に関して詳しい佐藤(1992)によると、隣接性の正体はいまいなままであり、したがって「じつを言うと、直喩や隠喩とちがって、換喩とは何かについては、まことに多種多様な意見が入り乱れていて、標準的な定義などというものはまるで存在しない」(同書p.143)というのが現状のようである。本小論では、隣接関係の正体を明らかにすることが目的ではないので、メトニミーの定義の一部にあいまいな点を残したままではあるが、典型的なメトニミーの例として一般に受け入れられそうな例を用いることによって議論を進めても、本論の目的には大きな支障はないものとする。
- 6) このことを具体的な例を示しながら明らかにし、メンタル・スペース理論と呼ばれるエレガントで説得力のある議論を展開したのは Fauconnier (1985/1994)であるが、同様の認識は、佐藤(1992)にもみられる。

表現をみても、くどい表現をはしょった言い方ばかりである。

しかし、省略法という経済原理だけでメトニミーを用いる理由のすべてが説明できるとは思えない。というのも、例えば、例(1)の場合、Platoという表現を用いて本を指すときに、発話者の意識にその本の装丁などの特徴はのぼっておらず、その本のもつ数々の特徴のなかから著者がプラトンであるという項目のみが選ばれており、発話者の意識の中にプラトンということのみが映っていることがその表現の動機づけになっていると考えられるからである。発話者にとって著者がプラトンであるということがその本を指示するときに最も重要な要素となっているわけである。また、その文を解釈する場合にも、われわれの注意の焦点をそこへ集中させる働きがある。

したがって、例(1)のPlatoがもつ意味には、第一に、単にある本を指し示すということだけでなく、第二に、指し示されているものもっている特定の側面（この場合は著者がプラトンであること）にわれわれの注意をいやおうなく向けさせるという機能も同時に含まれていることになる。もちろん言語表現は外界の存在物を指示するために用いられるという側面をもつため、第一の意味も大切であるが、発話者の認知作用を映し出し、表現の動機づけとなっている第二の意味もそれに劣らず重要な意味であると考えられる。

しかし先に見たように、真理条件意味論においては、記号と外界の存在物との対応関係のみが表現のもつ意味とされるため、この第一の意味を記述するだけで意味記述の作業は完了したことになる。そのため、理論上、第二の意味は無視されたまま放置されていると考えられるため、理論の枠組みに大きな変革を行わない限り、第二の意味を記述する仕組みが存在しないと考えられる。

一方、認知意味論においては、知覚心理学からのフィギュア（図）とグラウンド（地）に関する知見を得て、要素間のプロミネンスの違いを記述する仕組みが用意されている。プロミネンスとは「際立ち」のことであり、認知意味論においては、認知におけるプロミネンスを捉えようとする試みが行われている⁷⁾。いくつかの要素からなる情景を見たときに、それらの要素をす

べて同程度のプロミネンスでもって見ているわけではなく、要素のなかには低いプロミネンスをもっているものと、高いプロミネンスをもっているものがあるというわけでこれを記述しようとするものである。例(1)の場合には、著者がプラトンであるという特徴がプロミネンスの高いフィギュアとして理解され、それ以外の本の装丁や大きさなどの特徴がプロミネンスの低いグラウンドとして理解されているということになる。

真理条件意味論においては例(1)からこの種の解釈を記述することは望めない。なぜなら上記の第二の意味のようなものは、認知作用を捉えたものであり、客観主義意味論観にたつ意味論ではそのようなものをモデル理論的構築物として用意することができないからである。

以上、メトニミーのもつ意味に関して例(1)をもとにして考察してきたが、メトニミーのもつ第二の意味は、メトニミーのタイプによっていろいろ異なることが予想される。そのようにタイプによっていろいろ変わりうるにもかかわらず、認知意味論ではそれを記述することが可能であると考えられる点を観察するために、別のタイプのメトニミーの例として(5)について考えてみよう。

(5) Nixon bombed Hanoi.⁸⁾

例(5)は、

(6) コントロールする者がコントロールされる者を表す

というタイプのメトニミーである。もちろんニクソン自身が戦闘機を操縦してハノイに爆弾を投下したわけではなく、実際に投下したのは米空軍のパイ

7) 概念構造にもフィギュアとグラウンドの分化に対応するものを認めようとする議論に関しては、Langacker (1991a)、Talmy (1978)、Talmy (2000)を参照。

8) (4)はLakoff and Johnson (1980 : 38)からの例。下線は筆者。

ロットなのであろうから、(5)と同じ出来事を描写するのであれば、(7)のように言うことも可能であろう。

(7) The U.S. Air Force pilots bombed Hanoi.

したがって言語表現のNixonがもつ第一の意味である指示機能という点からだけ考えると、(5)のNixonも(7)のthe U.S. Air Force pilotsも同じ対象を指示していると考えられるため、真理条件意味論の備える意味記述の手段で取り扱うことができると考えられよう。

しかし、爆弾を投下した動作主を言い表す方法は、なにもNixonを用いなくとも、実際に爆撃したパイロットの名前（ここでは便宜上XXXとしておく）を用いて、例えば、

(8) The person named XXX bombed Hanoi.

と言い表すなど、ほかにいくらでも考えられるであろう。それにもかかわらずわざわざ(6)のようなタイプのメトニミーを用いて(5)のように言う理由はいったいどこにあるのであろうか。それを考えるためには、(2)の場合と同様、何を言うために(5)と言うのかということを考えてみると分かりやすい。例(5)が表しているような爆撃行為を描写するとき、いろいろな捉え方が可能であろうが、そのなかの一つとして（そして一般にこのような捉え方がされることが多いと考えられるが）、実際に現地で爆撃を行った人物が誰であれ、その爆撃を命令する立場にあった者に責任があるとの認識のもとに、責任の所在に目をむけることによって爆撃行為を捉えるという認知作用が働くものと思われる。例(5)の場合、最終的には大統領であるニクソンにハノイ爆撃の責任があるとの捉え方をしているからこそ、たとえば(7)や(8)のように言わないで、メトニミーという手段を用いて(5)と言っていると考えられる。つまりハノイ爆撃の責任がニクソンにあるとみなされていて、そのような捉え方が発

話者の認知作用の中心を占めており、責任の所在という点からみて、ニクソン自らが爆弾を投下したというのと等価な把握をしていることが表現のなかに発露していると考えられる。これが、例(5)のもつ第二の意味ということができよう。責任の所在が認知作用の中心を占めていない場合には、それぞれの捉え方に応じて、たとえば、(7)や(8)のように言うと考えられる。

また、このようにみてくると、例(2)について論じたときに述べた、メトニミーを用いる理由が省略法による経済原理だけによるわけではないという議論は、例(5)についてもあてはまると考えられる。

最後に、もうひとつ別のタイプのメトニミーについて考えてみよう。例(9)は、

(9) The mushroom omelet left without paying the bill.⁹⁾

(4)や(6)とはまた別のタイプに属すると思われ、一般に、

(10) 使用される物が使用する人を表す

と呼ばれるタイプのメトニミーが用いられていると考えられる。(9)における the mushroom omelet は、食べ物のことではなく、マッシュルーム・オムレツを注文した客を指すために用いられているのであるから、その客を指すためだけならば、(11)のように言うことも可能なはずである。

(11) The customer who had ordered the mushroom omelet left without paying the bill.

しかし、これまでにみてきた場合と同様、メトニミーを用いているからには

9) (9)はFauconnier (1985/1994:6)からの例。下線は筆者。

それなりの理由があり、例えばレストランの従業員が例(9)と言う場合には、マッシュルーム・オムレツを注文した人に人間としての関心がいろいろあるわけではない。そうではなくて、注文品に対する勘定に対して抱いている関心に支えられて、それを支払ってくれるお客としての関心があるにすぎないため、目が向けられている方向はその人が何を注文した人であるかの一点に絞られている。そのため、その客が勘定を払わずに行ってしまったことは、従業員の関心事という点からは、マッシュルーム・オムレツが行ってしまったことと等価であるということを言わんがためにこのようなメトニミーを用いていると考えられる。これが(9)のメトニミー表現がもつ第二の意味であるということができる。

なお、例(2)について論じたときに述べた、メトニミーを用いる理由が省略法による経済原理だけによるわけではないという議論は、例(9)についてもあてはまると考えられる。

このように、例(9)のメトニミーにも、これまで見てきた他のタイプの場合と同様、真理条件意味論では記述することのできない種類の意味が含まれていることが観察され、一方、認知意味論においては、マッシュルーム・オムレツがもつプロミネンスの高さを基にした記述が可能であるため、この場合も認知意味論の妥当性の高さを示唆するものということができよう。

IV まとめ

以上の考察により、真理条件意味論がメトニミーを含む表現の意味記述に関する限り、その仕組みに致命的な欠陥をもつものであり、それに対して認知意味論が、メトニミーのもつ人間の認知的精神作用を明らかに示す機能についても記述を可能にする装置を備えた、より妥当性の高い意味論であることが検証されたということができるであろう。

(筆者は関西学院大学商学部助教授)

参考文献

- Fauconnier, Gilles. 1985. *Mental Spaces: Aspects of Meaning Construction in Natural Language*, Cambridge, MA: MIT Press. Rev. ed. New York, NY: Cambridge University Press, 1994. (坂原 茂・水光雅則・田窪行則・三藤 博(訳) 1987/1996. 『メンタル・スペース—自然言語理解の認知インターフェース—』東京：白水社.)
- Fauconnier, Gilles. 1997. *Mappings in Thought and Language*. New York, NY: Cambridge University Press. (坂原 茂・田窪行則・三藤 博(訳) 2000. 『思考と言語におけるマッピング—メンタル・スペース理論の意味構築モデル—』東京：岩波書店.)
- 河上誓作(編著). 1996. 『認知言語学の基礎』東京：研究社出版.
- Lakoff, George. 1987. *Women, Fire, and Dangerous Things: What Categories Reveal about the Mind*. Chicago: University of Chicago Press. (池上嘉彦・河上誓作他(訳). 1992. 『認知意味論—言語から見た人間の心—』東京：紀伊國屋書店.)
- Lakoff, George, and Mark Johnson. 1980. *Metaphors We Live By*. Chicago: University of Chicago Press. (渡部昇一・楠瀬淳三・下谷和幸(訳). 1986. 『レトリックと人生』東京：大修館書店.)
- Langacker, Ronald W. 1987. *Foundations of Cognitive Grammar, Vol. 1: Theoretical Prerequisites*. Stanford: Stanford University Press.
- Langacker, Ronald W. 1991a. *Concept, Image and Symbol: The Cognitive Basis of Grammar*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Langacker, Ronald W. 1991b. *Foundations of Cognitive Grammar, Vol. 2: Descriptive Application*. Stanford: Stanford University Press.
- 坂原 茂. 1998. 「認知的アプローチ」『意味』(岩波講座 言語の科学 4) 第3章, 83-124. 東京：岩波書店.
- 佐藤信夫. 1992. 『レトリック感覚』講談社学術文庫.
- 杉本孝司. 1998. 『意味論 2—認知意味論—』東京：くろしお出版.
- Talmy, Leonard. 1978. "Figure and Ground in Complex Sentences." In Joseph H. Greenberg, ed., *Universals of Human Language*, Vol. 4, *Syntax*, 625-629. Stanford: Stanford University Press.
- Talmy, Leonard. 2000. *Toward a Cognitive Semantics, Vol. 1: Concept Structuring Systems*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Taylor, John R. 1995. *Linguistic Categorization: Prototypes in Linguistic Theory*, 2nd ed. Oxford: Clarendon Press. (辻幸夫(訳). 1996. 『認知言語学のための14章』東京：紀伊国屋書店.)
- Ungerer, Friedrich, and Hans-Jörg Schmid. 1996. *An Introduction to Cognitive Linguistics*. London: Longman. (池上嘉彦他(訳). 1998. 『認知言語学入門』東京：大修館書店.)
- 山梨正明. 1995. 『認知文法論』東京：ひつじ書房.